

当別文芸の会だよりNO,38

H25・5/27 発行 (連絡先・河地良一 Tel23-2103)

5月の読書会は辻邦夫の短編「北の岬」でした

桜の開花も3週間遅れの五月下旬。まだ肌寒い朝晩で、農作業もきつと遅れていることでしょう。会も4年目を迎えた今年最初の読書会は、5月25日(土) 13:30より白樺コミセンで開催されました。メンバーのみなさんも忙しい行事と重なったのか、参加者は8名でした。

今回の司会進行は、松本弘さんに担当していただきました。辻邦夫(くにお)の短編「北の岬」は、物語の後半の舞台が稚内です。ストーリーは、洋行帰りの主人公が、船の中で出逢った修道女(マリ・テレーズ)に逢いたくて、2年間の洋行を待っていた恋人を置いて北に向かい、稚内で再会を果たし、彼女も同じ気持ちでいたことを確かめるが、「人間の魂の豊かさが、眼に見えるものや、物質だけで支えられているのではない」という証しの前に、彼女が北の波に激しく鞭打たれるような心の葛藤が、暗澹(あんたん)とした北の岬に重なるという展開です。

参加されたみなさんの読後感は、情景の描写などは分かりやすく好評でしたが、キリスト教的な考え方の理解がなければ難しいなどの話題も出ました。

今回もまた、作品に捉われない話題や感想で大いに盛り上がりました。

6月の読書会は三好文夫の「重い神々の下僕(しもべ)」です

次回の読書会は、6月22日(土) 13:30より白樺コミセンです。三好文夫は昭和4年(1929)富良野市に生まれ、道内の教員を経て、作家活動に入る。

この「重い神々の下僕」は現職中の昭和40年に発表。同年の直木賞候補にもなっている。今回は7月の「文学散歩」との関連で、北海道の歴史とアイヌ文学を知る作品として取り上げました(5月欠席された方には資料を同封)。

「当別文芸」(第3号)6月下旬に発行されます

第3号には30人(35編)が寄稿されました。A5版240ページ、900円で頒布されます。昨年同様PRも含めて、頒布のご協力をお願いいたします。

7月27日(土)は「文学散歩」一登別・白老方面です(案内は次号で)

5月20日だというのに肌寒く、ようやくサクラが蕾をつけたような日でした。今回からもう一人新会員を交えて参加者13名での読む会が開かれました。会員は全部で19名です。

まず、1回目に東前さんが作って配布してくれた『石狩川ノート』の「難解語句や注釈」が『石狩川』を読むときに大変便利であり、かつ歴史解説もあり、人物の簡単な紹介もあり、虎の巻のようなテキストなので、これから10回にわたって作ってもらうことにしました。さらに、それらを活用するためには、毎回課題のページの分を事前に作成、配布することになりました。東前さんには大変な労作でしょうが、どうぞよろしく願いいたします。

今回は2章1節～4節まで、堀江が話題提供しました。2つの点において、一つは54pからの伊達邦夷(文中)がそもそも蝦夷(北海道)に来ることになった歴史的背景の部分と文語体で書かれている文章を東前さんに説明してもらいました。この内容は一章でもそれぞれの登場人物の気持ちの中に沸き起こってくる「悲惨な歴史的背景」があるからです。

2つ目は「玉目の妻」が吾妻に「本当に夫は亡くなったのでしょうか」という問いかける場面。実はこの言葉はそう単純なことではなかったのです。当時の男女身分の違いの感じ方、また「逃亡と死」が象徴する意味合いなど、なかなか興味深い話ができ、大変話が深まりました。他に参加者と堀盛のことや奥羽列藩の歴史認識、「馬の気持ちと吾妻の気持ち」や地理的な不明点などを話している内に、2時間はあっという間に過ぎました。

次回は6月17日(月曜日)13時30分から、福祉センターの2階で始まります。課題範囲は5節～10節までです。どうぞ、石狩川ノートを活用して読んでください。(文責:堀江)